

ひとりひとりの子どもと「いま」を生きる

津守 真

手をひかれる

今年度、幼稚園部の担任をしている私は、ひとりの子どもの相手をしていても、他の子どもたちにあたえず気を配らねばならぬ立場におかれている。校長として全員に心をかけるのは何週間かの間にすることだが、担任の場合は毎日常時のことである。ひとりの子どもを相手にしていても、他の子どもたちがどうしているかと思うと気が落ち着かなくなる。

ずっと前から私を頼りにして毎日を過しているK男は、私のこのような気持の変化を敏感に察知していたようである。ことばをはなさないこの子どもは、要求があるときには大きな声を上げて歩きまわるのだが、四月にはそれが多くなっていた。同じあそびをしていても、この子どもの動作に微妙な変化がある。滑り台の上のバルコニーで私と目を合わせ

て、見えかくれする遊びが好きで、そのときに私の頭を柱の鉄棒の定位置に固定させてからこの遊びをはじめた。私がどこかにいってしまわないようにということのである。

他の子どもが一緒にいる空間では、私は複数の子どもと共に楽しみたいと思うから、床の上をころがったりふざけたりすると、他の子どもたちは喜んで、この子どもは立ち上って身体を戸口の方に向け、手を後に差し、べて私の手をひく。私がすぐに應じないと次第に大きな声を上げる。私が複数の子どもたちの中でたのしみたいと思うことが、K男にとって好ましくなかったことがわかる。この子どもは私との間に閉じた空間をつくっておきたいらしい。

そんなとき、たまたま通りかかったひとりの先生が、正面からK男の顔をみて、ウワーと声を出してふざけた。K男は大口をあけて笑い、この数週間にたえず一緒にいた私には見せなかったうれしそうな表情を示した。ときどき私の方をふり返りながら、その先生との間で数分間やりとりをつづけた。

私は、日頃、学校を、どの子どももそれぞれがあるままで生活できる場としたいと考えている。だが、こうして私が折があれば他の子どもたちに目を向けようとしてその子とつきあっているときには、その子が他の子どもと一緒に遊べるように変化しなければ生活しにくい状況をつくっているのではないか。そう思っていると、私もその子と一緒にいることに疲れてしまう。それではこの子どもにとってここは居心地のわるい場所であろう。

K男は私との間で閉じた空間をつくりたい。それならば、私もその中で積極的なたのし

み、その空間に生命を注ぎ、そのときの「いま」を自分が生きる場所とすることが求められているのではないか。

自我の支えとなる

このことの一週間前、K男は私と机の上で粘土をしていた。K男はへらで粘土にすじをつけたり切ったりするのが好きなのだが、私の手にへらを持たせ、自分の手でする代りに私にやらせていた。もうひとり別の子どもがきて、同じ机の上で粘土をいじりはじめ、しばらく三人でやっていた。突然、その子がK男の手にしていたへらを取り、顔を叩いた。

K男は声を上げ、部屋の真中に向かってふらふらと歩いていった。

こういうとき、この子どもは、手に持っていた物を取り返すことをせず、おとなに助けも求めず、声を上げて彷徨する。抵抗するほどの自我の強さがなく、あてどなく歩き回りながら発する声は、虚空にこだまする響きのように感じられる。私は急いでK男のあとを追ひ、手を差しのべる。叩かれて自分を喪失したように感じても、支える人はいるのだよとわかってもらいたいと思い、私はK男と手をつないで歩きまわる。

間もなくK男はいつものように私と自転車にのり、背中にもたれかかった。こういうときには殊更に重く私に寄りかかる。

K男の自我は、とくべつに弱く、信頼する大人に支えられてようやく保たれていることが分かるので、K男が私を求めるときには、私もしっかりと応答することがこの子にとっ

ては必要なのである。そういう思いと、他の子どもたちへの心づかいで、私の気持が引き裂かれる。

いまを生きる

それが必要だという理由でつき合っているときには、私もその子と過すそのときを心からたのしめていない。たとえ時間は短かくとも、共にいるその時をゆっくりとたのしんで過すときにはじめて子どもと心を通わせ合うことができるのだろう。

このように反省した私は、次の日、とくに自覚してK男と共に過す「いま」を充実して生きることを心がけた。滑り台の上で目を合わせる遊びをするときにも、そのときを活気をもって、楽しむようにした。他の子どもたちのことを見ていないというわけではない。私が眼前につき合っているその時を、ひとつずつ、十分に生きているのである。そうすると、子どもはそのひとときの中で、その大人からしっかりとみてもらっていることを確認できるのである。K男はその日から面白そうにし、バルコニーで私いつもの遊びをしている間にも、窓越しに室内の大人を見て声をかけ、笑いかけたりすらしめた。私については安心して他のことへと関心を向けたのだと思う。そのうちに室内に入ってゆき、しばらく私のところにもどってこなかった。先学期以来久しくなかったことであった。この日、思いがけず、私はほかの子どもともゆっくりとつき合う時が与えられた。たったこれだけの自分の覚悟が、子どもにはこんなにも大きなことだったとあらためて思わされた。

まだ起っていない何かを予想して自己防衛しているときには、人はいまを十分に生きていない。ひとりの子どもとのおいまを大切にしていたら、他の子どもたちへの配慮が薄くなるのではないかと心配するのもそのたぐいである。ふと私は幼いころの自分の幼稚園の先生の横顔を思い出す。私が覚えているのは、私の傍に立ちながらいつも遠くを見ていた、私に寂しさを感じさせたその横顔である。こんなことを数十年もたってから書くのは申し訳ないような気がする。だがだれにでも起りうるひとこまである。この先生も、私とつき合いながら他の子どもたちのことを気にして遠くを見ておられたのかもしれない。

K男はこの日以来、私と面白く過したあと私からはなれて遊ぶ時間が増し、私は他の子どもと交わることが少しずつ容易になっている。

学年があらたまると、以前と環境が変わらないように見えても、子どもにとってはクラスや先生の様子に変化を察知していることが多いと思う。大人の信頼を確認したい子どもをかかえて、複数の子どもをみるのには人手が足りないことを感じさせられることも多い。その中でひとりひとりの子どもと確かな関係をつくるのには、並ならぬエネルギーを要する。だが、瞬時でもひとりの子どもと共にあるその「いま」を自分が本当に生きているなかつたら、子どもたちの生活は充実してこないのではなからうか。

ある訪問

四月の末、かつての学生であったひとりの若い幼稚園の先生が訪ねてきた。三十五人の

子どものクラスを担当していて、学年はじめには、衣服を着がえさせたり、靴を探したり、いつも二、三人の子どもを脇にかかえ、全員を帰すと体中の力が脱けてしまうという。それでも先生が緊張にひきつった顔を子どもに向けたら、それだけで子どもはたのしくなくなるだろうから、ひとりずつの子どもにもゆっくりと腰をすえて接するのだという。いまを大切にする若い先生の四月の奮闘ぶりが、私にはよく分った。

(愛育養護学校)

